

想い出すままに

古賀千鶴子

前・九州大学医療技術短期大学部助産学特別専攻

受話機を取るとはじけるように元気な声が聞こえてきました。かつての教え子、山崎裕恵さんでした。

彼女とは、もう10余年前のことですが、クラス会に招かれてお逢いしたままでした。その時家庭にいと聞いていたので、その後、広島総合病院の総婦長さんに「産婦人科の病棟婦長として広島在住の卒業生をご紹介下さい」と懇願された際、山崎さんを紹介したのです。総婦長さんからは、「何度も足を運び、説得し、ようやく目的を達することができました」と喜びのお手紙を頂いたことを思い出します。山崎さんには大変ご迷惑だったと思いますが……。

このようなこともあり思わず「りれ一随筆」の依頼を引受けてしまいました。最近は専門書を手にすることもない私ですが、想い出すままに綴ってみたいと思います。

学生と共に学んだ日々

過ぎ去った38年間の教師生活。退職を目前に控えた頃、「あーあ、あっという間に過ぎた気がする」と私はよく言っていました。「まあ先生、私が生まれる前からお勤めしといて……」と目をぱちくりして皆はあきれていました。

おもえば新制度の学校創立以来今日まで、いろいろなことが思い出され走馬燈のように脳裡をかすめます。

学生たちは継続ケースとして、妊娠5か月から産褥1か月までの7か月間、初・経産婦さんをそれぞれ1人ずつ受け持って看護していました。学生たちは外来受診の度に呼び出されて診察を介助し、その月の保健指導をしていました。ある妊婦

さんの指導に私が立ち合い、指導内容に目を通すと「妊娠中毒症の予防」「貧血」等々、日常生活に対して細かく計画し、しかも解りやすいパンフレットを作成して妊婦さんに渡して指導していたのには感心したものです。それにもかかわらず、授業では厳しいことばかり言う私に、涙した学生さんも少なくないのではないかと、いまさらながら反省しております。これも愛の鞭であったとお許し頂きたいと思うのみです。

また、産褥10日目の初産婦さんの家庭訪問に同行したときには、「おっぱいを飲ませて1時間位寝かせるとすぐ泣き出すので、自分ご飯を食べる暇もない」と疲れ切った褥婦さんもありました。雨のしとしと降る中を褥婦さんの家を尋ね尋ね歩いたこと等々、想い出はつきません。

助産所実習では、学生が純真なるが故につい漏らした一言が助産婦さんを刺激し、市の助産婦会で問題となり、学生の助産所実習をすべて断られたこともありました。やむなく県の助産婦会長さんをお願いして、県下の助産所開設者を紹介して頂き、1人ひとり訪問してお願いしました。なかなか実習を引き受けて下さる方がなく途方にくれた日々もありましたが、やっとのことで10か所の実習場所を確保することができ、ほっとしたものです。諸先生方の深いご理解とご指導を頂き感謝致しております。

おかげさまで卒業生の中には実際に助産所を開設した人もあり、また分娩は取り扱わなくても、「おっぱい110番」、「母子保健指導センター」等の名称で、自立して活躍している人も数人あります。

最近の医療機器の発展は目ざましく、昔のような開業は無理かと思いますが、せっかく助産婦に



許された開業権をできるだけ多くの人が利用できるように、叡智をしばって近代的な開業をしてほしいと願わずにはおれません。

在職中はより良い教育を目指して試行錯誤を繰り返しながら、1年1年を一生懸命に生きてきた自分の人生を、いましみじみとかみしめております。

助産婦の将来

戦後、分娩様式の近代化により大きな施設での分娩が次第に増加しました。それに加えて出生率の低下により、開業助産婦さんをはじめ、助産院、産婦人科医院も経営がむずかしくなり、閉鎖のやむなきに至るところもあり、誠に残念でございます。

しかし、分娩は病院集中の傾向にあるとはいえ、今日でも立派に助産所を経営している助産婦さんもいらっしゃいますし、産婦人科医院を開業して大病院よりも多くの分娩を取り扱っている所もあります。当福岡市内の病・医院を見ても、きちんと教育を受けた助産婦さんがいる所は大変繁昌しているように思われますが、これは私のひいき目でしょうか。

分娩数は少なくなったとはいえ、この世に人類が生存している限り、お産は繰り返され、助産婦は必要なのです。今後も医師とは違った細かい気くばりで看護し、保健指導をしてゆく必要があると思います。

わが国だけではなく、アジアの諸国に目を向けてみても、教育された助産婦はいくらいても足りないと思います。助産婦の皆さん、自信を持って頑張ってください。

寿命が足りない

私は1987(昭和62)年3月に停年退職し、6月から2年間、日本看護協会福岡県支部長、福岡県看護協会会長をつとめ、その後は同会の監事、組織改正委員として現在に至っております。

1990(平成2)年に「福岡母性衛生学会」が発会したとき、久永会長から、監事は長老がなるのだそうだから、古賀さんをお願いしたい、とうまく持ち上げられ、引き受けてしまいました。また、ボランティアとして「福岡命を尊重する会」の副会長と、子育て真最中のお母さん方を中心に月に1回行なわれている「母の会」の相談役として、一緒に勉強しております。

その一方で、退職後は何か趣味を持っていなければと、在職中からお茶の稽古をしていましたが、今は先生のすすめにより、お抹茶だけでなく、お煎茶、番茶道も稽古し結構楽しんでおります。また3年前から書を習い始め、「50の手習い」どころか66歳の手習いとなりましたが、これがまた楽しいのです。

「呉昌碩」「王鐸」「王羲之」等々、いくら書いても限りがありません。それに漢字だけでなくかなにも挑戦したいなどと欲張ると、奥の深い書道の道は長く、寿命がいくらあっても足りない、としみじみ思う今日この頃です。

* * *

次回は、今年4月から九州大学医療技術短期大学専攻科に帰ってこられた浅生慶子さんをご紹介します。

国立小倉病院の助産婦学校創立のご苦勞や、現在いろいろとご活躍のようすをお聞かせ下さい。